

本地垂迹の原理

權田雷斧

私は其實餘り深く神道のことは研究も致して居りませぬが、唯だ聊か覺え得ましただけのことを御話いたしますのであります。

本地垂迹といふことに就て古人の書に、どうも日本は神國であるからそこで佛教を廣げやうといふには是非神佛を一つものにしなければ弘通に不便である、そこで便宜上空海が本地垂迹といふことを云ひ出したもので、詰り佛教を廣げやうといふ二種の佛教で云ふ方便、所謂一つの手段より起つたことであるといふやうに論じた者があります。併し實際佛教の教理の眞義としては本地垂迹といふことが明かに説かれてあることなどで、私の考では日本の神佛の調和は先づ推古帝の朝、聖德太子時代に起つたものであつて、此時に神佛の調和といふことが何となう行はれたものであると斯う考へられる。但しそれはどうかといふと法隆寺の金堂です、法隆寺の金堂に於て聖德太子が法華經を講讀し勝鬘經を講讀したのであるが、其法隆寺の金堂の奥まりたる左右に影向の間と稱へて居る所がある。それは勝鬘經法華經講讀の時に住吉明神と春日明神が影向をなされたといふことで影向の間といふものが出來て居る。今の法隆寺の金堂は太子時代の建造物といふことで、中には平安朝末期のものだなどといふ喜田貞吉氏などの議論がありますが、

多くは太子時代に決定されて居るやうである、そこで之を影向の間といふと、之を平易にいへば日本の神様が佛教を御好み遊ばすといふことで、それで聖徳太子の法華或は勝鬘經講讀を隨喜しそれが爲に御出に相成つたと斯ういふことである。あの時代は又本地垂迹といふ所までには進みませぬが、神佛の調和といふものは此に於て取られたものである。佛教を日本の神様が御好き遊ばす御喜び遊ばすといふことに相成つた。さういふことになりましたから自然上も下も皆さういふやうな意味で佛教を信するやうになつた。佛教を信するといふに就て其當時の状況を見ますと私が申さいでも歴史で皆様御承知でせうが、神と佛といふものを隔て、別のものゝやうには思はれて居らないやうに思はれる。

それが段々進んで來て奈良朝に下つて本地垂迹は奈良朝で大佛建立の時に始めて現れたと申しますが、但し奈良朝時代にもきつぱりと本地垂迹といふことが明瞭にはなつて居らないかと私は思ふ。大佛建立の時に聖武帝の勅命を奉じて行基僧正が伊勢の宗廟に參籠せられた其時に大神宮の御託宣があつたといふことである。先づそれが本地垂迹といふことの起りのやうになつて居るけれども、佛教の學は奈良朝時代が一番細やかだ。今日如何に其後の學者が佛教の教義を研究しても奈良朝の研究の上に挺出することは出来ませぬ。奈良朝の佛教の研究は非常に細やかなものである。細やかな譯である。奈良朝の佛教は所謂議論的佛教であつて此に一人の死亡者があると、佛教の教式に依つて之が葬禮を出すといふ時に、棺桶を前に置いて講讀を致した。論議を致した。お經の講釋を講師がします。さうするとお經の講釋に就て論議を致す、

それが葬式の作法である。それですから凡てのことが論議であります。それで毎日論議をやつて居つた。三十講といふのは、今日でも三十講の書いたものが古いもので奈良に遺つて居りますが、是は三十日毎日々々講義をするのを筆記して之を三十講と稱へる。三十講といふ三十日づゝ纏めたものが奈良にはありません。細やかに研究をされて居る。それですから日本佛教の研究の最も細やかなるものは奈良時代の研究で、どうしても奈良朝時代の研究の上に出る譯には行かないのです。其奈良朝時代の研究で東大寺興福寺即ち東興兩寺の先哲の編輯のものを見ますと、はつきりと本地垂迹といふことはいふてない。本地垂迹といふ意味合ひは多少知れて居るけれども、何を讀みましてもはつきりと本地垂迹といふことはいふてありません。併しあの頃ほひには、もう本地垂迹といふやうな意志は表せられて居つたかと思ふ。それで奈良の總ての教式を御覽なさると一番よく分る。佛教と神道といふものが奈良朝に來ると一つのものゝやうになつて居る。それは奈良の東大寺の二月堂の會式といふものがあるが、密教である。密教であるがどう傳へて來た密教であるか私が研究が出来ないといふのは、東大寺が祕密にしているて聽かせない。一切一山不出であるというて聽かせない。作法を見ると密教であるが、どう傳へて來てどうしたのか分りませぬ。そこで若水といふものがありますが、あの側に長屋みたやうな堂がありますが、二月堂に一山の僧侶が一週間で前に參籠して、さうして所謂別火を致し毎日一山の僧侶が一心に勤行を努める。それがすつと神道です。注連を張つて粗蕨が敷いてある。着る物が餘ほど變つて居る。着るものが上から下まで紙袍カキコだ。がさが

さいはして紙を着て居る。それから二月堂で實施する作法が餘ほど面白い。丁度神道者が祓をするやうに祓をする。其言葉が佛教の言葉でないので神道の祝詞式の言葉で作られて居る。中には少し佛語が交つて居るが、言葉が諸々の罪穢れを祓ひ給へといふやうな言葉が使つてある。それで總ての作法が佛教の教式が這入つては居ますが、神道臭くなつて居ます。あの邊を以て見ると奈良朝の佛教は神道と佛教の教式とまるで混和して居たものと私は思はれる。

然るに本地垂迹といふことは密教といふ眞言宗の法が渡つて始めて本地垂迹といふことが明かに證據立てられることになつた。それで其描き出したものが密教で傳へて居る曼陀羅である。其内胎藏界の曼陀羅が一番分り易い。又はつきりと本地垂迹のことを明瞭に説いたものは大日經である。それで傳教大師が始めて日本では完全なる所の密教を傳へられた。それ前にも日本では密教が種々傳はつて居りますが、役の小角が孔雀經の法を傳へて、謂はゞ孔雀經の法の眞理を得てそこで色々な不可思議な事を致した。併し役の小角が何人に就て孔雀經の法を傳へたかといふとは歴史が明瞭でありませぬが、役の小角の像に一方の手に錫杖を持って一方の手に巻物を持って居ますが、あれが孔雀經ださうであります。其次には大安寺の道慈律師といふのがあります。大安寺の道慈律師が入唐せられて、是は明かに歴史があるが、善無畏三藏に會うて密教の小部分虚空藏求聞持の法を傳へられて、(小部分だけではあるが)さうして歸られた。歸られて其虚空藏求聞持の法を道慈律師の弟子の善議に傳へ、善議は弟子の石淵の勤操に傳へ、石淵の勤操は弟子

の空海弘法大師に傳へられたといふことでは是は明かになつて居りますが、併ながらそれは密教の一部分の一部分であつて、日本に於て一番最初に完全に密教を傳へられた人は傳教大師であると申さねばならぬ。ところが傳教大師が密教の祖師にならなかつたのは、傳教大師は台密戒禪と唱へ天台と密教と圓頓戒と遼磨の禪と四つ傳へて來られて比叡山に此四つを御弘めになる積りであつた。考へて見ると天台宗にも歴史があります。傳教大師は此四つをばら／＼に行うて此四つの調和を見ないでもよいといふ積りではなかつた。此四つを調和して一つのものとして比叡山に弘める積りで居つたが傳教大師は後半生は南都諸大寺の僧統等と辯難攻撃の間に葬られて居る。それは傳教大師の書を拜讀すれば明かに分る。何しろ宗旨を四つ調和するとか調和せぬとかいふやうなことで宗旨が巧く出來て居りませぬ。さういふ風に四つを傳へられて天台宗は四つとして傳へられて居りますから、密教の祖師とお成りなされなかつた。而して天台宗で傳へられて居る密教は傳教大師の密教でない。密教の法流は比叡山に行つても分らぬ。議論の間に傳教大師は葬られて居る。けれども其時に既に傳教大師が金胎兩部を傳へられた。其次に弘法大師が支那に渡られて金剛界、胎藏界完全の密教を傳へさせられた。ところで弘法大師前にも傳へられたといふことは證據立てられて、又其外華嚴宗も傳へられて居ります。けれども其頃弘法大師が歸られて禪を弘めやうといふ御考はなかつた。そこで單に密教を弘めやうとせられたのは弘法大師である。それで弘法大師は第二番目の祖師である。ところが密教に依て本地垂迹といふことが明かになつたから、そこで本地垂迹といふこと

は空海傳教の時に盛んに唱へたものと私には思はれる。尤も空海傳教の著作の中にも明かにそれを唱へられて居ることなのである。それは決して何も佛敎を弘めやうとして本地垂迹を説いたのではない。敎理がそれである。

それで維新の際には神道と佛敎と判然分けられた。それですから佛敎と神道とはずつと相離れて遠ざかつたものになつた。それで私共最初の頭には、天台宗には山王一實神道と兩部神道があります。眞言宗には此兩部神道が三つに分れて居つて御流の神道、三輪流の神道、雲傳の神道と三派に分れて居る。それでも廢されたものと私は思つた。傳へて居る方も是を廢されたものと思つた。然るに櫻井能監といふ人が内務省の書記官であつた時代に同氏の言はるゝには、宗敎のともいろ／＼調べて盛んにしななければならぬが、兩部神道は此頃一向御話がないが、どうなさつたかといはれた。そこで私は兩部神道は神佛判然の際に最早廢されたものと思つて居ると申しましたら、そんなことはない、宗敎にまで手を入れるやうな事は致さぬ。それは矢張り兩部神道は兩部神道で政府は存在を認めて居る。何故なれば兩部神道のいはれて居る本地垂迹といふことは佛敎の敎理である、佛敎を弘めて行く以上は本地垂迹は廢することは出来ぬ。日本は神國である。兩部神道を研究して些と御弘めになるが宜しからうといはれて、私は成程さういふことかど氣が付いたやうことであつた。斯様な次第で此佛敎の存在する限り本地垂迹は否定することは出来ぬ。若し本地垂迹を否定すれば佛敎を否定してしまはなければならぬ。

それは大日經に説いてある毘盧遮那といふ佛がある。毘盧遮那といふ佛は言葉を換へていへば萬有の原則、宇宙の眞理である。其毘盧遮那といふ佛が誓願を立てられてある。所謂願を立てられてある。五願を立てられてある。之を五大願といふ。其五つの願の意志に依てお經を拜讀して見るといふと、凡て佛教では凡夫より聖人に至り佛になるまで段階を區別して之を十法界、十通りに致します。下から數へると、先づ地獄、地獄の次が餓鬼、餓鬼の次が畜生、それから修羅、それから人間、天、此天までが六凡といつて所謂凡夫だ。凡夫であるが其間に優劣があることは明かである。それから聖人といふ側にも亦段階がある。聲聞の次が緣覺、それから菩薩、佛になる。斯ういふ風に次第して優劣を論じて居るのが佛教である。そこで此毘盧遮那といふ佛が若し茲に佛教の言葉でいふと衆生界にあつて、ブラマ——梵天ですな——を信じて凡て幸福を得むと欲する者の爲には、毘盧遮那がブラマの身に現じて之を方便引接する。そこで又いろくの神様——日本の言葉でいふと天神地祇であるが——を信する者があつて、是に依て幸福を得、道を得むと欲する者の爲には如何なる神の姿をも現はして之を方便引接する。又人に依て以て道を得、幸福を得むと欲する者があれば、其者の爲には人の姿を現はして其人に道を説いて方便引接する。又或は畜類——動物ですな——を信じて是に依て道を得、幸福を得むとする者があれば、如何なる動物の姿をも現じて十方法界に周遍して方便引接すること斯の如くであるといふとをはつきりと説いてある。それであるから致して若し日本の人が日本の天神地祇に依て幸福を得、道を得むと欲する時には、此毘盧遮那は

日本の神に姿を現して道を與へ幸福を授けると斯ういふことになつて居る。毘盧遮那といふものが所謂地獄より致して佛に至るまでの十法界の身に應じて其衆生界の欲するところに従つて種々なる姿を現じて之を方便し引接し幸福を與へるといふことが大日經に説いてあるのである。更に進んで申せば獨り人類動物ばかりでない。或は草木の身をも現する、或は國土の身をも現する。草木の信仰を以て道を得、幸福を得むと欲する者の爲には草木の姿を現はし、山河草木如何なる姿をも現はす。斯ういふのが大日經の教説である。それであるから印度よりいたして支那に來り、更に日本に來つて佛敎の寺には其處の神様が祭られる。印度のブラマ敎で祭られる怪しき神が悉く眞言天台の方に祭られてある。其内に明王とか、天部などいふものには怪しき像がありますな。印度のブラマ敎で祭る神様、是も毘盧遮那の示現である。支那に參りましたも支那の寺にはいろいろの神様が祭られてある。怪しき像が祭られてある。毘盧遮那が支那に於ては支那の神様を現はし、日本亦然りである。斯ういふ教理である。それであるから毘盧遮那が本地であつて其處で衆生界の欲するに従て姿を現はしてそれから徐々ど方便引接して眞の道を得せしめ眞の道に入らしむるといふのが密敎の教理である。

それでありますから本地垂迹といふことを此に於て明かに教理が證據立て、居る。この教理を丹青の功を藉りて書き現はしたものが即ち曼陀羅である。曼陀羅に就てはお經に明かに説かれてある。其經文に依て始めて之を書かせられたもので、それが今日本に傳へられて居る。曼陀羅に金剛界の曼陀羅と胎藏界の

曼陀羅といふものがある。どうして二つになつたかといふことは次にお話いたしました。是は清凉寺の惠果阿闍梨が經義に依て書かせられた。それが傳はつて居る。曼陀羅を描き始められたのは古き支那に於て金剛智三藏が金泥曼陀羅を書かれた、大方紺紙金泥で書かれたものであらう。其圖様は明かに毘盧遮那といふ佛が種々の姿を現するといふことを描かれたものである。お經は印度で説かれたものですから、其お經に依て描かれた曼陀羅には印度の神様だけしか書いてありませぬ。則ちブラマ教で祭る神様しか書いてありませぬけれども、若し實際にいふならば支那にあつては支那の神様も書くが宜い。日本にあつては日本の神様も曼陀羅中に書き込んで宜い譯である。さる人が若し佛在世に基督教が盛んに行はれて居つたならば、必ず胎藏界の外金剛部に基督の十字架に掛つた像も書かれたのであると斯ういつて居りましたが、洵にそれは然りである。がまだ其頃には基督などいふものは聞えませぬから書いてありませぬ。それだから曼陀羅の中に日本の神様も書いて宜い譯である。日本の神様を書き現したのは流石は日蓮上人で、曼陀羅中に日本の神様を書いた。あれは圖ではない法曼陀羅と言つて文字の曼陀羅です。私の方では字で書いた曼陀羅を法曼陀羅といふ。日蓮宗の方では文字曼陀羅といひますが、それと同じやうな理窟である。其文字の曼陀羅に天照大神、春日八幡ずつと日本の大小神祇が書いてある。日蓮上人だけは曼陀羅中に日本の神様を書かれた。それであるから本地垂迹といふことはさういふ原理に依て唱へ來るのであるから、佛教は皆さういふ意味である。密教のやうに明かに説かなくても佛教の教理としては皆本地垂迹といふ意

味は含蓄せられて居る。又日本の各宗の祖師方の説かれたのに一人として本地垂迹といふことを唱へられぬ祖師はない。最も本地垂迹に就て烈しく説かれた祖師は古い所では弘法大師、鎌倉時代にあつては浄土真宗の祖師、親鸞上人なども一向専念の一門のやうにいふ者あるも、御消息を拜見すると正しく本地垂迹といふことをはつきりと述べられて居る。であるから本地垂迹といふことは經に確乎たる據り所なく佛教を弘めむが爲の手段に起つたものでないといふことを御話を致すのであります。そこで本地垂迹といふことはさういふことで是が最も兩部神道の大本を造つたものでありませう。

そこで兩部神道といふものが天台と眞言とにある。天台の方では山王一實神道と稱へて傳教大師に山王權現の現れといふことで行はれた神道、それはさういふことがあつたでせう。あつたでせうけれども今日行ふやうな作法儀式の譯のものではないだらうと私は思ふ。其本地垂迹を終には、擴張して兩部神道といふものになつた。どうも私は兩部神道のことに就ては大に疑問を有つては居ますけれども、先づ眞言宗の方では御流の神道といふ其御流の神道の血脈といふものを見ると嵯峨天皇が教祖である。血脈といふものゝ次第を見ると天神七代、地神五代——是は少しく脱線した話かも知れませぬけれども、天神七代、地神五代といふものが佛教を何か標準に取つたかと思ふのであります。佛教では過去七佛といふことをいひますが、過去七佛が標準になつて天神七代になつたのではないかと思ふ。地神五代といふのは密教で五佛といふことをいひますが、五佛が地神五代の標準になつたのではないかと思ふのですが、古くよ

り天神七代、地神五代と唱へ來つて居ります。けれども是も古事記などに依つて見ると、天之御中主命、高御産巢日命、國常立命、其他天神が七代より餘計ある。だから天之御中主命から天神七代といふのは七佛といふものが標準になつたのであらう。地神五代といふのも五佛が標準になつたのであらうと思ふ。是は餘談ですが血脈を見ると天神七代地神五代となる。——そこで神武天皇から歴代の陛下を列して桓武天皇、平城天皇、嵯峨天皇、弘法大師、眞雅、廣澤の方では寛平法皇といふやうに參つて血脈は書いてある。そこで兩部神道には神道灌頂といふとがある。神道灌頂といふものが所謂陛下の御即位灌頂なのである。即ち神道灌頂といふ作法の行はれたのは醍醐天皇廿一年正月十八日に始めて神道灌頂が行はれたと傳へて居る。其所謂神道灌頂の作法は、今度御大典に就て吾々は近く參列を至しませぬからして存じませぬが、參列をせられた御方に拜聴したり又御書き物に依つて見ると、どうも神道灌頂の作法です。唯だ御即位の式は其時に灌頂使が參つて御灌頂をしたのです。灌頂の阿闍梨は眞言天台と極まつて居つた。灌頂の阿闍梨がある。ところで中古には天台の方でも衰へて別にさう卓然とした阿闍梨が無かつたので天台座主が參つて御即位灌頂を執行するといふとに決まつて居つた。御流とは嵯峨天皇の始めて空海に傳へさせられた流儀で陛下の御流であるので御流と稱へたものでありますが、其御流の神道の灌頂の作法はどうも陛下の御即位の作法と髣髴として居る。それから御流の神道の教理といふものは前申す如く日本大小の神祇、天神地祇を以て直きに大日如來の垂迹であるといふ。大日如來の垂迹であるから致して即ち日本の大小の神祇

は直きに胎藏曼陀羅が素因であると斯ういふ風に唱へて居る。そこで神道を以て直きに佛道と看做したのである。それだから神道を修行するに密教の總て三密といふものを以て修行して行者が神様と一つものになつて終に行者が神様になる。神様になれば即ち佛になつたのであるからそれで成佛いたしたのであると斯ういふ風に立てるのが此兩部神道の御流の教理である。是は少く他の事でありまするけれども、古い處は佛道を修行して佛様になるといふやうに説いたものである。古い所は佛道を修行して其結果成佛して神様になるといふのが。神のやうに祭り込んだものです。それは其實例を示すといふと、比叡山の前の座主は不二門智光といつた、あれを教育家宗教家懇親會の時に「ふにもん」といふのを「ふじかごちこう」といふたから隨行が「ふにもん」というて下さいと云つた。不二門といふのは四足になつた石の鳥居だ。それから比叡山の慈覺大師のお墓があるが石の鳥居が立つて居る。若し比叡山に御出になつたならば少し廻りですけれども——元とは慈覺大師の墓地へ行くには道が悪くて漸く辿り辿り行つたのですが、何年ばかり先きか一千年祭の時に修築して道路が出来て人力車が行くやうになつた。餘り道を良くすると神々しくなくするのです——行つて御覽なさい、新しい鳥居が立つて居る。それから惠心僧都の御廟へ行つて御覽なさい。あれまでに念佛を弘めた方のお墓に鳥居が立つて居る。慈慧大師——良源大僧正は天台中興の座主ですが、其良源大僧正の御廟へ行つて御覽なさい、ちゃんと鳥居が立つて居る。之を以て佛道を修行して神様になるといふことが分つた。神様と佛様といふものは全く別のないものと斯ういふことになつて來た。そ

れであるから日本人民の信仰又神佛といふものが全く隔てのないものと斯うなつて信せられて來たものである。日本書紀の兼良公の纂疏などは佛教の教理などを以て神代の卷を説いて居ますな、あゝいふやうになつて來た。是が兩部神道の御流の教義である。それで神道灌頂の作法をしますのに鳥居などを立てたり神を用ゐたり神道の今日使用するものを皆用ゐて居る。それから作法をしますのに中臣の祓を讀みましたり或は古代の歌などを讀んで灌頂の作法をする。随分阿毘羅維咩アヒラウヰケ欠などいふことも加はつて居らないこともない。といふのが神道灌頂の兩部神道の御流の作法である。此御流の灌頂の作法は陛下の御即位の作法と髣髴として異なつて居らない。是が御流神道である。併し後に至つては終に兩部神道といふものが妙なものに段々なつて來て所謂外宮の豐受大神は金剛界の佛、天照大神は大日如來の垂迹である、何神は何佛の垂迹であるとしたのは後の末のことですそれは一向典據は明瞭でない。何もそんなことはない。あゝいふやうに本地垂迹を何神様はきつぱり何佛といふやうなことは是は餘ほど後のことであらうと思ふし、未だに典據を得ることは出来ない。そこで又佛様が神様に祭られて居ますが、延喜式などを讀むと藥師神社といふものがあります。ところがあゝいふことは地方には幾らもある、私しの國に地藏堂村といふ所がある。氏神が地藏様である。地藏堂が其部落の起因を成したものでありませう。今日では大部落になつて居りますが、地藏様が氏神である。祭典は神主が來て地藏様の寶前に奉幣をして御祭りをして居つた。それが維新後になつて地藏様を神様にしようとしたが、どうもなか／＼神様になり兼ねた。別に氏神を造つたが、

其氏神は維新後新に造られたのでありますから、矢張り今日でも地蔵様が住民の頭に深く刻まれて居つて、神主を頼んでやる譯にいかぬと見えまして、お寺さんなどを頼んで大般若などを轉讀をしてお祭りをして居る。私の近邊に上岩井村といふのがありますが、上岩井村には行基菩薩創建の観音様がある。是も鄰村の鳥越に八田某といふがありました、観音様に御神酒を供へたり榊を供へる。観音様に神道の儀式から御肴の鯛などを供へまして維新の始めまでやつて居ましたが、祝詞を讀んで居りました。それで維新前は神と佛といふものが殆ど隔てがなかつた。それだから佛を信する信仰と神を信する信念といふものは日本人に二つなかつたといふことを明かに證明される。それだから致して又佛教の方でも本地垂迹と唱へるけれども、佛道を修行する結果神になるといふことは比叡山の慈覺大師のお墓に鳥居が立てられて居るのが證據である。今一ついふと維新前は佛教の祖師方などの廟所に於て改まつた祭典には奉幣したのである。切下げたのではない田樂幣といつて四角なものを竹に下げたものである。今でもあります。古い所は杉の木などであつた。斯ういふ譯では是が兩部神道の有様である。然るに此兩部神道といふものが最初は淨らかなものであつたに違ひないが、神佛の調和は此に於て取られたに違ひない。それであるから致して本地佛は別ですが本地佛でなくても神の御神體といふものがある。それは古い刀を祭つたり或は古い劔を祭つたりするのは姑く措いて、私共の方の可なり宜いお宮で神社になつて居りますが、其處の神の御神體といふものが劔に蛇が絡まつて居る。どういふ譯ですか分りませぬが、私の國は新潟縣ですが、神様は蛇のや

うにいふたものであります。立派な鳥居を立て、お上げした所が蛇が出て鳥居を巻いた。鳥居を立て、貫つて喜ばしいから神様がお出ましになつたなど、人民がいうて居た。現に蛇の絡まつたのが御神體になつて居るのがある。それは佛教でいふと俱梨迦羅不動の像であります。俱梨迦羅大龍など、説きますが、それなどである。それが後に至つて大に怪しきものになつて參つたのである。怪しきものになつて今日では此兩部神道といふものは行はんと欲すれば十分には改善をしなければならぬものと斯う私は考へて居ります。それから御流の神道といふものは即ち嵯峨帝と弘法大師との間に造られた神道であります。其作法は即位灌頂に髣髴たるものであります。

それから鎌倉時代でありますが、三輪流の神道といふものがある。慶圓上人といふ御方が三輪の明神より傳へられた。之を三輪流の神道といふ。三輪流の神道は御流の神道より餘ほど奇怪なものに變化して居ります。三輪流の神道は三輪明神が山王權現と御同體でありますから、天台の方に傳へられて居ります。一方は眞言宗の方に傳へられて居りますが、三輪流の神道は御流の神道ほど盛んでなかつた。そこで三輪流の神道も最初は淨らかなものであつたでせうが、後に至つて大に妙なものになつて來た。之を改善せむとして徳川氏の時代になつてから河内の高貴寺の慈雲律師といふ大家がありますが、日本の小釋迦など、稱へられた程にて時の陛下の御歸依僧である。此慈雲律師が新たに兩部神道を造られました。其慈雲律師の著作せられたものを見ますと、「私に此神道を造るのである。果して杜撰なものもあらむ」といふ斷り

は出來て居るが、之を慈雲の傳へた神道であるから雲傳の神道といふ。此神道は餘ほど改善せられて餘ほど淨らかに出來て居る兩部神道である。今日世に兩部神道として行はれて居るもの、何れの人も敢て怪まぬものは雲傳の神道、雲傳の神道にはすつと中臣の祓までそれ／＼註釋のやうなものが附いて居つて、雲傳の神道は淨らかである。天神七代地神五代の肖像をすつと祭りますのですが、その事は御流の神道には無い、國常立命とか或は伊邪那岐、伊邪那美命とか文字で書いて祭りますから怪しくはない。三輪流の神道は肖像を以て祭つて居るから頗る怪しいものである。先般何年ばかり先きであつたか帝大構内の御殿で私が矢張り今晚御話するやうなことを申した時に、總て御目に掛けて宜いやうなものを持つて行つて天神七代、地神五代の肖像を持つて行つて掛けた位であります。頗る奇怪なものである。奇怪なものは最も宜しくないといふ考で慈雲律師はあらせられたと見えて、雲傳の中の神道の神様は皆何れも斯ういふ風にしてすつと圓い圓相の間に姿を現はして居られる。怪しむべき所はないやうな像まで書かれました。之を雲傳の神道といふ。此雲傳の神道が今日兩部神道では正しいものと私は思はれる。が是は眞言宗に傳へて居る所の兩部神道の三流である。

そこで其天台の方には山王一實神道といふものがありました。山王一實神道が矢張り御即位のやうな作法を致したか致さぬかといふ所は何も古い所では分りませぬ。唯だ山王權現と傳教大師との間に一つの眞言が傳へられたと云ふ丈はあつたやうに思はれる。それは山王一實神道は一實相の神道といふことです

からさうなのである。それを御即位などの式のやうに嚴重な灌頂の作法を天台でのみ致したかどうかといふことは明瞭でありませぬ。恐らく致さなかつたご私は思ふ。致さなかつたから三輪流の灌頂を向ふへ移したものだと思はれる。然るにそれを南光坊天海の時に作法灌頂に編み立てられました。それは東叡山で元と行ふたのでせう。それは作法灌頂の式がちやんとある。それはもう一つ交つて居るが神儒佛合併の作法灌頂である。神儒佛——神道と儒道と佛教——と合併した作法灌頂が出来て居る。灌頂の時には投華というて目隠しを打つて華を散らすといふことがある。華を散らす時に敷曼陀羅といつて段の上に敷いて置く曼陀羅がある。神道灌頂で三輪流ならば神様の怪しき御像を書いて敷いて置く。御流ならば御名前を書いて敷いて置く。此神が我れに有縁の神様で、此神の行ひをして我れが神になつて行くといふ。それを敷くから敷曼陀羅といふ。南光坊の易の八卦を書いたものがありますな。何とか卦に立つから何とかいふのでありませう。それが天台に行はれて居る。恐らく天台の方で兩部神道の灌頂の作法に就て行ふのは南光坊天海が始りであらうかと私には思はれる。

そこで是で先づ佛教の灌頂と神道のことは概略御話を致したことでありますが、吉田家の神道は歴史に依て御調べになれば分りますが、吉田家の神道を唯一神道と稱へて居つたのですけれども、あれが全く兩部神道であつたもので、それは斯うなつて來る、天台の兩部神道は神佛習ひ合せたが、佛教が表になつて居る。吉田の神道は兩部習合であるけれども、是は神道を表にして居る。天台と違ふ。そこで天台眞言

は佛教を表にしてゐる、それが宜い譯である。卜部の吉田の神道は卜部兼俱が造つた神道である。卜部の兼俱に就てはいろ／＼説がありますけれども一説に依ると、あれは天台宗の人であつた。天台宗の人が或事情に依て郷里へ歸られて吉田家の後を襲がれたのが卜部兼俱である。それであるから佛教の教式を採つて神道を表てに佛教を裏面に存して造つたのが吉田の神道。それであるから壇の飾り方が十八行事壇といひます。護摩壇のやうになつて居る。十八といふ数はどうして神道で採つて来たか、密教の十八道といふ行ひから採つて来たものか十八行事壇といふものを造つた。それから今一つが火焚行事とか火祭行事といつて火をどん／＼焚きます。鳥居を立てた四角な壇場を造つて眞言宗の護摩を焚くことを採つて来て之を火焚行事火祭行事といふ。三元壇といふのも此方に置く。三壇行事と之を唱へて居るのである。何れも佛教の天台眞言の密教の作法を採つて来た。それですから矢張り吾々からいふと吉田の神道は兩部神道といはなければならぬ。但し其行式は嚴かなものである。吾々は吉田の神道が盛んであつたから一種の行式を存じて居りますが、尙ほ壇場のことなども多少記憶して居ります。又吉田の神道を傳へた人が如何なる嚴格な態度を採つて行ふたかといふことも想像して居ります。殆ど吉田の神道を傳へた人は行ひ澄まして居る人で神様のやうに考へられました。さうでせう毎年寒行をする。寒行といふのは自分の家に居りまして上壇の間に注連を張つて粗菰を敷いて其處へ這入つて行ひをする。無言別火でさうして毎日海邊の神主は海に行つて汐水を被つて垢離をして行ひをする。若し海邊でない神主さんであると普通の水に食鹽を

交せて致した。さういふ風に行ひをしたもので徳高く行ひ進んで居る人は私共が子供の時に何といふことも無う敬意を拂うて有難さうに神様のやうに拜まれたものであります。行式も斯様に今日の祭典の式などよりも頗る厳かにして何とも神座ますやうに拜まれたものである。それはどうも古く吉田兼俱が精神を凝らして造り上げたる作法であるから、さういふこともあらうと私は考へられる。是も矢張り兩部神道で維新後になつてそれ等の神道は廢されましたことではありますが、此吉田の神道は最も研究すべき價値あるものと思ひましたのであります。が私は餘り兩部神道を好かないといふのは常に穢はしいことが兩部神道にありましたから、研究する値打がないといふことを感じて深くは研究しませぬから存じませぬが、先づ是で本地垂迹の御話と兩部神道に就て私の唯だ心得て居るだけの御話は致しました。其他尙ほ御即位灌頂のことなどもありますが、それは眞言を唱へ印を組んだり或は作法でありますから、茲で御話を致した所が御分りもありませんまいと思ひますから、それは略します。是で御免を蒙ります（完）

